会員の声

冨田弘一郎さんの思い出

松村雅文（香川大学教育学部）

冨田弘一郎さんが5月22日にご病気でお亡くなりになったという訃報に接しました。享年81歳とのことでした。冨田さんを偲び、ここに思い出を記します。

冨田弘一郎さんのお名前を最初に拝見したのは、1969年、私が小学校4年の頃、月刊誌『天文ガイド』の「望遠鏡をテストする」という連載でした。この連載は、各回ごとに望遠鏡を評価し、記事の最後には100点満点の点数をつける、というものでした。その頃、少しずつ天文や望遠鏡に興味を持ち始めていた私は、望遠鏡は単に遠くのものを大きくして見るものと思っていました。しかし、この連載で、望遠鏡は色々な側面を持つ装置であることを学んだような気がします。それと同時に、色々な望遠鏡を毎月評価されている冨田さんを、非常にうらやましく思ったものでした。その頃の私には、望遠鏡自体が雲の上の存在でした。

冨田さんに実際にお目にかかったのは、大学の2年生の頃、仙台市天文台での冨田さんの講演会だったと思います。太陽系の小天体についての講演で、最後に質問の時間が設けてありました。生意気な学生だった私は、変な質問をして冨田さんを困らせた記憶があります。疑問に思ったことは何でも質問して良い、という一般的な原則はあるものの、一方で、ものには限度がある、ということを学んだ瞬間だったような気がします。

私が大学院生の時には、今は閉所になった堂平観測所でお目にかかったことがありました。観測が終わり、食堂でビールを飲みながらくつろいでいた時でしたが、冨田さんから「君のいる大学からは、どんな有名な天文学者が出ていますか？」と質問された記憶があります。今度は私が返事に窮する場面でした。

更に、1994年、オランダのハーグで行われたIAU通常総会の懇親会でもお会いしました。私は当時新婚で、妻を連れて参加しており、妻について問われました。

「あなたの奥さんも天文ファンですか？」

この時も私は一瞬困りましたが、次のように答えました。

「いいえ。でも、今から教育します。」

もっとも、こう答えた後、10年以上経ちましたが、この言葉の成果を未だに出すことができていません。天界から、まだまだですね、という冨田さんのお言葉が聞こえてきそうです。

ここに記した事柄は、いずれも極めて個人的なものばかりです。冨田さんに関する天文学的なことは、より学問的に繋がりがある方々により、他でご紹介されることと思います。存在感があり、影響力が大きな方だったため、天文関係の方々には、大なり小なり私と似たような経験をお持ちの方も少なくないと思いますが、僭越ながら筆をとらせていただきました。

心からご冥福をお祈りいたします。